文化と芸術
文化・芸術研究センターニュースレター
Vol.12
September 2010
Art & Culture

CONTENTS

巻頭寄稿 1
文化芸術セミナー紹介 2
活動報告 3〜5
インフォメーション 6〜7
特別研究報告 7
インフォメーション 8

静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター
静岡県浜松市中区中央2丁目1-1　〒430-8533
●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

文化・芸術研究センター長
三枝成彰
Shigeaki Saegusa

文化は国家の安全保障

〜西洋文化の分母の上に、日本文化の分子を乗せて発信する〜

今年の４月、文化・芸術研究センター長に任命された、三枝です。

今回、私を推して下さったのは以前から親しくさせていただいている川勝平太知事でした。今回の知事からのじきじきの任命をたいへん光栄に思うとともに、私のような者がお手伝いすることで、少しでもこの大学に学ぶ学生の皆さんや、関わっておられる教職員の皆さんのお役に立てたらと思います。

私は以前から、文化一般についてのコメントなどを求められたとき、よく「文化は国家の安全保障」であると、唱えてきました。つまりは、西洋文化の分母の上に、日本文化の分子を乗せて発信すること、それがひいては国際社会において日本のよさをアピールし、その立場を守ることにつながる、ということです。

皆さんの身の回りを見て下さい。そこに西洋文化、西洋文明の所産でないものがいくつあるでしょうか？今や私たちの生活のほとんどが、西洋文明によって生み出されたプロダクトや慣習にどっぷり浸っているといっても過言ではありません。

そうなったのはなぜでしょうか？答えは簡単です。それがとても便利で合理的だからです。そういう西洋文明の利便性を知ってしまったら、もはやもとには戻れなくなったというのが正直なところなのでしょう。

もちろんそれは、私たちの住む日本だけに限った現象ではありません。今では世界のどこに行っても自動車が走っていますし、人々は洋服を着て、英語を話します。西洋人の発明した、利便性にまさる数々のものに、非西洋の文化・文明はいつのまにか駆逐されてしまったのです。そして現代では西洋文明をベースに置かないことには、衣食住はおろか、人々の思考すらも成り立たなくなってしまいました。

では、そのような世界に生きる私たちは、何をよりどころに自国の文化を発信していけばよいのでしょうか。西洋文明が浸透しきっているこの趨勢が止められない、変えられないものならば、それを逆手に取ればよいのです。先ほど書いた「西洋文明の分母の上に、日本文化の分子を乗せる」とは、そういう意味なのです。

私が仕事にしているのも、作曲家として西洋音楽を作ることです。二十代のあるとき、ポーランドでこんな体験をしたことがあります。私の作品をあちらの演奏家が演奏してくれるということで招かれたのですが、そのとき地元の学生から、「あなたは日本人なのになぜ西洋音楽を書いているのか？」と聞かれ、答えることができなかったのです。幼いころから何の疑問もなく西洋音楽を学び、仕事にした私にとっては、まさに晴天の霹靂でした。

それからは悩みました。今さら歌舞伎や能の音楽を書いても何にもならないことはわかっている、しかし、日本に生まれて西洋音楽をやっている自分とは何なのだ、という自問自答の日々です。三十代はほとんど、三味線や箏などの邦楽器を取り入れた曲を書くこと、そしてテレビや映画の音楽を書くことに費やしましたが、なかなか答えは出ませんでした。

そうした苦闘のあげく四十代なかばにしてようやく得た結論が、“美しいメロディーとハーモニーへの回帰”だったのです。

それまでの現代音楽は、曲自体のよさよりも、誰もなしえなかった切り口や新しいコンセプトの提示を重んじるものでした。とにかく新しいものを尊び、評価する風潮は二十世紀芸術の大きな流れとしてありましたが、物語性のない小説はやがて読まれなくなり、絵画も抽象画から具象画へとシフトしてきたのにもかかわらず、音楽だけがいまだに1930年代の思想によりかかっています。乱暴な言い方をすれば、ジョン・ケージの残した仕事以降、新しいものは出ておらず、音楽界はほとんどの聴衆を置き去りにしてきました。それを間違いではないかと私は思うとともに、美しい音楽に回帰することは懐古主義ではなく、むしろそれこそが二十一世紀の新しき前衛ではないかと考えました。日本人ならではの情緒性、官能性を前面に出し、美しさに“泣き”、“溺れる”ことが真に創造されるべき新しい音楽なのだと思い立ったのです。それを発信することが自分の仕事なのだと。

いま学んでいる学生さんたちは、昔よりもはるかにグローバル化や技術が進んだ世の中に暮らしています。私が悩んだようなことすら、皆さんにはつまらなく思えるかもしれません。しかし、それだけに自分のあげた声がすぐに世界につながってしまうたやすさと怖さの両方を手にされているとも言えます。自由度が増したぶん、中身が問われています。

若い皆さんもおおいに悩んで、いま、この日本から、自分の見つけた「答え」を発信していただきたいと思います。将来の日本の顔となるのは、皆さん一人ひとりだからです。

文化芸術セミナー紹介

舞台芸術の国際交流とその意義について

高田和文（文化政策学部芸術文化学科）

国際交流というとつい最近の現象のように思われるかもしれないが、舞台芸術の国際交流の歴史はたいへん古い。その形態は大きく分けて２つあると考えられる。１つは翻訳上演による外国演劇の移入、もう１つは直接舞台公演を通じた交流である。

前者の例としては、古代ローマにおけるギリシャ劇の翻訳上演が挙げられる。古代ローマ人がギリシャの文化を積極的に模倣したことはよく知られているが、演劇も例外ではなかった。プラウトゥスなど、現在まで知られている古代ローマの喜劇作家はギリシャ喜劇を盛んに翻訳・翻案して上演した。その辺の事情は、昨年刊行された小林標著『ローマ喜劇』（中公新書）に詳しい。

また、近代においてはドイツのゲーテやシラーがシェイクスピアなど外国の戯曲作品を積極的に翻訳した例がある。近代の演劇は言葉を主体としていたこともあって、異文化移入の方法として翻訳上演は理にかなっていた。ヴェルディによるシェイクスピア劇のオペラ化などもこの範疇に入れてよいかもしれない。

さらに、我々にとって最も身近な例は、明治末期に始まる日本の新劇運動である。周知のように、新劇運動の中心的役割を担った築地小劇場は、当初西洋戯曲の翻訳上演のみを行なうと宣言した。それは伝統演劇である歌舞伎とも、また伝統と西洋演劇の間の折衷的な形として生まれた新派とも決別し、新たな演劇の創造を目指した小山内薫らの強い意志の表明であった。

次に、直接舞台公演を通じた交流に目を転じると、これもたいへん歴史が古い。典型的な例は、16世紀ごろにイタリアで成立したコンメディア・デッラルテ（仮面即興喜劇）のヨーロッパ各地への伝播である。この場合、イタリア人の劇団がドイツ、フランスなど周辺諸国に巡演するという形で演劇の様式が他国に波及した。特に、フランス王室に嫁いだメディチ家のカテリーナ（仏名カトリーヌ・ドゥ・メディシス）とマリーア（同マリー・ドゥ・メディシス）が、贔屓の劇団をパリに同行させたことから、コンメディア・デッラルテは王室お抱えの演劇となり、その後も「イタリア人一座」として長くフランスに定住し、活動した。

同じくイタリアで誕生したオペラについても、舞台公演中心の国際交流が行われた。18世紀まではオペラと言えばイタリア・オペラ、つまりイタリア語で書かれた台本にイタリアの作曲家が曲を付けたものを指すのが通例だった。そうした事情から、イタリアの台本作家や作曲家がヨーロッパの主要な宮廷劇場で活躍することになった。台本作家としてはメタスタジオやダ・ポンテ、作曲家としてはピッチンニ、パイジエッロ、チマローザ、サリエリが挙げられる。また、当時は有名な人気歌手も各地の劇場で演じた。

近代から現代にかけて、演劇が文学性を強めこともあって、翻訳・翻案上演が国際交流の主流だった。しかし、近年では交通手段の発達と情報化の進展により、むしろ直接の舞台公演による交流が盛んになりつつある。イタリアに限って見ても、ここ20年ほどミラノ・スカラ座をはじめとする主要歌劇場の引越し公演、ミラノ・ピッコロ・テアトロの来日公演などが相次いでいる。他方、イタリアにおいても歌舞伎・能などの伝統芸能や前衛演劇、さらにごく最近ではコンテンポラリー・ダンスなど、日本の舞台芸術が直接紹介される機会がますます増えている。

このように長い歴史を持つ演劇の国際交流であるが、その意義はいくつか挙げられる。

１つは、異文化理解の方法として独特の役割を果たしている点である。舞台公演においては、演じるものと見るものが同じ空間と時間を共有することが不可欠となる。ここが、美術や映画などと異なるところである。また、舞台作品にはそれを作り出す人々の精神と身体、生活や社会のあり方が色濃く反映される。舞台上とはいえ、そうしたものを同じ時間・空間の中で体験できるというのは、演じる側にとっても見る側にとっても大きな意味を持つ。私自身は、異文化理解の手段として、演劇や舞台芸術は最も有効ではないかと考えている。

もう１つは、創作意欲の刺激と共同作業による新たな作品創造の可能性である。これはもちろん舞台芸術に限らないが、特に集団の作業が前提となる演劇や舞踊の場合、関係者が相互に刺激を与え合い、さらには共同で作品を創造しようという試みが生まれやすい。これも現場で俳優や演出家が直接交流するという舞台芸術の特質から生じるものだろう。

たとえば、日本とイタリアの間では、十数年前から狂言とコンメディア・デッラルテに関するいくつかの共同プロジェクトが進行している。当初はそれぞれの演目を同時に上演する、あるいはシンポジウムやワークショップを開催して両者の類似点や差異を明らかにするといった単純な企画だったが、やがて両方の俳優が同じ舞台で演じる、イタリア人俳優が狂言を演じる、日本人とイタリア人が狂言の舞台で共演する、さらには同じ脚本を狂言とコンメディア・デッラルテの２つの様式で舞台化するなど、非常に興味深い方向に進みつつある。

情報化が進むにつれて、生身の俳優が演じる舞台芸術はかえって魅力を増してゆくに違いない。そして、そういう時代であるからこそ、膨大な労力と経費を要する舞台芸術の国際交流がますます大きな意味を持ってくるのではないかと思う。

活動報告

静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2010　前期公演

小岩信治（文化政策学部芸術文化学科）
望月成美（芸術文化学科２年
「室内楽演奏会2010」学生スタッフ）

本学の室内楽演奏会2010は前期・後期合わせて５会場で３シリーズの演奏会が行われる。このうち前期の公演として６月11日金曜日に本学ギャラリー、12日土曜日に浜北文化センターにて、「東京藝術大学学生による室内楽演奏会」が行われた。現役の東京藝術大学の学生による演奏会は、昨年に引き続いて2回目であり、昨年からの連続出演となる学生１名を含め、6名の学生が出演した。昨年大盛況を博したことに加え、本年が10周年記念年にあたることもあって、本公演は昨年同様の学内公演とともに、「室内楽演奏会」として初めて、中区以外での市内公演となる浜北文化センターでの公演を行った。

演目は、ブラームスのピアノ連弾曲とモシュコフスキーのヴァイオリンとピアノのための組曲、そして今年が生誕200周年を迎えるシューマンのピアノ五重奏曲であった。

本学学生にとっては、同年代の演奏者による演奏に刺激を受けると同時に、とくに公演の学生スタッフにとっては、プロの演奏者としてこれから活躍していく東京藝術大学の学生と交流する良い機会になった。

本学ギャラリーでは昨年同様、演奏者を西側（「く・る・る」バス停側）に配置し、客席はL字を描くように演奏者の前方と上手側に、合計110席ほど用意した。ピアノは中区の「アポロ・スタジオ」から東洋ピアノ「ゲール・アポロ（Ger. Apollo A-188E)」を借用した。透かし彫りの譜面台が特徴的で、ピアノの主要部分がドイツ製のピアノである。演奏者たちは当初、弦楽四重奏との音のバランスを取るのに苦労していたが、本番では伸びやかな弦楽器の音と東洋ピアノの柔らかい音がよいバランスで聴けたように思う。

浜北文化センター小ホールの収容人数は300人で、一つ一つの席は広くゆったりとしている印象を受けた。本学ギャラリーのように演奏者との距離が近くはないが、ゆっくりと落ち着いて演奏を聴くことができ、前日とは全く違う緊張感のある雰囲気であった。また浜北駅から徒歩5分とアクセスも良く、外部からのお客様向きの演奏会であった。ピアノは、ホールに備え付けられたヤマハ株式会社のコンサート・グランドを使用し、大学での公演とは全く異なるまっすぐ音が飛んでくるようなはっきりとした音が響いた。奏者たちは前日との響きの違いを考慮しながら、ピアノの高音と低音で弾きかたを使い分け、弦楽器との音のバランスをとっていた。同じ出演者、同じ演目ではあったが、会場や使用楽器（ピアノ）が異なることで全く違う雰囲気が作り出されることが確かめられた。

後期は11月に２シリーズの公演が行われる。まず11月12日金曜日19時には本学講堂で「相曽賢一朗ヴァイオリン・リサイタル」が行われる。翌週月曜日（11月15日）の同時刻にはアクトシティ浜松音楽工房ホールにて「ショパンの愛したプレイエル・ピアノ」公演が組まれている（東京公演は11月9日火曜日19時開演）。

この２つのシリーズにおいても、６月のシリーズと同様、芸術文化学科を中心とする本学学生がプロフェッショナルな演奏会事業に立ち会い、また広く本学の学生が、そして社会人聴講生を含め大学を軸とした地域の方々が、大学の特性を生かした演奏会を体験することになる。とくに「ショパンの愛したプレイエル･ピアノ」公演では、この演奏会シリーズの出発点となった2006年の公演と同じく、浜松市楽器博物館が所蔵する歴史的ピアノ（1830年製）を弾く小倉貴久子ら歴史的楽器の専門家が再結集される。ショパン記念年の終盤を飾る学館連携のユニークな企画として、浜松の「鳴り響く文化財」の価値が、本学の研究・教育活動と結びついたかたちで市内外にアピールされるだろう。

「東京藝術大学学生による室内楽演奏会」より

活動報告

路上演劇祭シンポジウム報告

池上重弘(文化政策学部国際文化学科)

はじめに

2010年5月23日（日）、静岡文化芸術大学にて路上演劇祭シンポジウム「劇場からとび出した演劇～私にとっての『路上』の意味～」が開催された。本稿ではまず、浜松における路上演劇祭の歴史を振り返った上で、2010年度の路上演劇祭において本学がどのように関係したかを述べる。その上で、シンポジウムの概要について報告したい。シンポジウムの内容そのものについては、本学研究紀要Vol.11（2011年3月発行予定）にて詳細に報告する予定なので、ここではごく簡単にとどめたい。

浜松における路上演劇祭

路上演劇というジャンルは日本ではあまりなじみがない。しかし南米では、民衆文化の表現手段として、あるいは社会的弱者の解放の武器として、劇場という権威ある空間とは異なる「路上」という公共空間での演劇が表現手段として確立している（ボアール 1984『被抑圧者の演劇』晶文社）。

日本で路上演劇祭が始まったのは2001年のことだが、その立役者は浜松在住のマイム・パフォーマー里見のぞみ氏であった。里見氏は1992年、メキシコの路上演劇祭に出会い、路上という一般市民に開かれた場での演劇による社会文化活動に魅了された。ギジェルモ・ディアス氏の仕掛けによるその路上演劇祭では、路上に暮らす子どもたち（ストリート･チルドレン）が演劇を見せるなど、演劇の在りようや社会的意義を根源から捉え直す契機になったという。

2001年、世田谷と浜松を会場に路上演劇祭Japanがスタートした。世田谷ではその後毎年開催され現在に至っているが、浜松では2001年の第１回以後、しばらく中断していた。浜松での第２回開催は2009年のことである。2001年の第１回でも、在日ブラジル人を中心とした劇団の芝居やブラジル人青少年のソシオドラマ・ワークショップの成果発表など、浜松ならではの多文化状況を反映した公演も含まれていた。2009年の第２回ではさらに、「多文化共生」をテーマにしたヒストリー・ワークショップに参加したインドネシア・ブラジル・ペルー・日本の若者たちによる手作りの芝居や、在日ブラジル人がシナリオを考えた芝居も上演された。

路上演劇祭Japan in 浜松2010と静岡文化芸術大学

浜松での第３回開催となる2010年は、第１回から数えて10年目を迎える年でもあった。2001年の第１回の折も静岡文化芸術大学の教員と学生有志が実行委員会に参加していたし、本学講堂ではギジェルモ・ディアス氏らを招いて、「路上演劇～表現すること、人と出会うこと～」という公開セミナーが開催された。

路上演劇祭そのものは5月22日に旧松菱デパート前のフェンスを撤去した場所で行われたが、静岡文化芸術大学創立10周年記念事業のうち多文化共生関連事業の一環として、本学を会場に以下の関連イベントが前後して行われた。(1)ペルー、インドネシア、そして日本の若い世代が互いの経験を共有しながらそれを芝居に創り上げてゆく「多文化共生ワークショップ」、(2)メキシコから来日した俳優らによるメキシコ･ワークショップ（具体的には身体表現ワークショップとソシオドラマ・ワークショップ）、そして(3)路上演劇祭シンポジウムである。

シンポジウムの概要

第１回のシンポジウムと同様、メキシコから来日した俳優・芸術監督のギジェルモ・ディアス氏が基調講演において、メキシコでの経験をもとに路上演劇の意義を述べた。娯楽、祝祭的な側面のみならず、ストリート・チルドレンやドラッグ、暴力などをテーマとする路上演劇では、演劇が路上という社会と切り結ぶことに積極的な意味が与えられ、人びとが自分の生き方や可能性を再発見するというのである。

続いて、劇場の外で演劇を展開している４人（４組）を迎え、路上演劇に関する活動報告を受けた。登壇者は、成沢 富雄氏(演劇デザインギルド代表理事)、岸井 大輔氏(劇作家)、お芝居デリバリーまりまり、田村 エミリオ氏(静岡県立大平台高校講師)である。とくにまりまりの報告は、国内外での演劇を通じた活動の紹介のみならず、実際にステージ上で昔話を演じ、客席との一体感を体験させるワークショップ的内容であった。さらに本学大学院の高橋諭氏の司会によるパネルディスカッションでは、演劇が劇場の外に飛び出すとどういうことになるのか、演劇の先鋭的、今日的なありようをめぐる議論が展開した。

お芝居デリバリーまりまりによる
昔話「大きなかぶ」を一緒に演じるパネリストら

活動報告

夏季手づくり公開工房
～10年を振り返るパネル展を同時開催～

2010年夏季手づくり公開工房を開催

「2010年夏季手づくり公開工房」が８月21日、22日の両日開催された。今回の公開工房では「レーザーカッターで作る干支時計（講師:田邊英隆)」、「楽しく木炭デッサンをする（講師:鳥居厚夫)」、「光具vol.16　電球オブジェ（講師:佐藤聖徳)」、「テキスタイル（手織り）（講師：種村興治、桑原壽子)」の４講座が開講され、計42名が受講した。

公開工房は毎年夏季と春季の年２回行われているが、ここ数年、開設されるほとんどの講座は定員を上回る申込みがあり、大学の施設、設備を使って手づくりの作品をほぼ１日がかり（講座によっては２日）で仕上げる実習講座には毎回熱心な市民が集う。

テキスタイル　自分の作品を手に

「公開工房」の歩み

本学では市民が参加し、学内の工房で手づくりの作品を仕上げる「公開工房」を、本学開学の年である2000年から続けて開催している。開学間もない2000年８月、「ランチョンマットを織ってみよう」「ランチョンマットへプリントしてみよう」「銅板でオリジナルのお皿をつくろう」「木製の鍋敷づくりに挑戦」の４講座が開かれ、延べ18人が受講した。以後ほぼ毎年、夏季（８月）と春季（３月）の年２回、各回５講座程度が開講され、昨年度までの実績で通算19回、開講講座数88、受講者の延べ数は889名に上る。

講座の内容は多岐にわたり、テキスタイル、木工、金属加工、スケッチ、デッサン、パソコン使用による製作などが主な分野であるが、製作時間、作業の難易度、工房の設備等を考慮した適切なプログラムとすべく、各講座を指導する担当講師は毎回工夫を重ねている。

今年は創立10周年を記念して、過去の公開工房の様子をパネルにまとめ、自由創造工房内に展示している。

本学創立10周年を記念し、公開工房の歩みを展示

高い満足度、“手づくり”の楽しさ

公開工房では毎回受講者に対しアンケートを実施しているが、寄せられる回答から受講者の満足度は総じて高いといえる。特に多いのは、自分の手でモノを作るのが楽しかった、工房の雰囲気や担当講師の丁寧な指導がよかった、などの感想である。年齢層は幅広く、20代は少ないが30代～60代が中心で、70代以上の受講者も少なくない。現在では約半分が２回以上の受講者、いわゆる「リピーター」であり、残りの半数が新規の受講者である。

「公開工房」は開学以来10年間の実績を積み重ね、手づくりの楽しさを市民の間に広めながら、本学と地域との交流においても中心的な役割を担ってきた事業のひとつである。今後も受講者、市民の要望を広く聞きつつ、本学教員、工房設備など大学のリソースを適切な形で地域に還元する方法を検討し、より市民に親しまれる事業としていきたい。

木炭デッサンの制作風景

インフォメーション

静岡文化芸術大学
創立10周年記念事業
ふりかえれば未来 SUAC10

OPERA
SHIZUOKA INTERNATIONAL OPERA COMPETITION

静岡国際オペラコンクールセミナー

オペラおもしろ講座“どうしてヒロインは死んじゃうの?!”

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

第６回静岡国際オペラコンクール（2011年11月）の開催に先立ち、オペラの魅力を楽しくご紹介する「オペラおもしろ講座」を静岡県下３会場で開催します。

ヴィオレッタ、ミミ、トスカ、カルメン、蝶々夫人…

この人物たちの共通点は、皆オペラの有名なヒロインということです。更に、もう１つの興味深い点は、全て劇中で死んでしまうということです。

本講座では、本学の平野　昭教授がこうした疑問を楽しく解き明かし、更に、地元を代表するディーヴァたちの名アリアもたっぷりとお聴かせいたします。

申込方法　電話またはFAX・Eメール・はがき（①～⑥の必要事項を記入）のいずれかにてお申込みください。
[電話での受付時間　平日午前９時から午後５時]

必要事項：①希望会場②参加希望者氏名③郵便番号④住所⑤電話番号⑥同伴者がいる場合は同伴者氏名（３名まで）

問い合せ・申し込み
静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局
〒430-8533 浜松市中区中央２－１－１(静岡文化芸術大学内)
電話：053（457）6446　FAX：053（457）6447
Eメール:opera@suac.ac.jp

申込受付　９月１日(水)開始（受付先着順）
受 講 料　無料

開催地	日時	会場	出演者
浜松	11月13日（土） 14:00～16:00	静岡文化芸術大学講堂	伊藤真友美(ソプラノ) 柳澤利佳（ソプラノ） 小林えり（ピアノ）
静岡	11月27日（土） 14:00～16:00	静岡県男女共同参画センター あざれあ大ホール	横山靖代（ソプラノ） 海野智美（ソプラノ） 薩川美和子（ピアノ）
三島	12月11日（土） 14:00～16:00	三島市民文化会館小ホール	小林教子（ソプラノ） 百瀬美樹（ソプラノ） 大野浩嗣（ピアノ）

企画制作主催／静岡文化芸術大学　特別公開講座

静岡文化芸術大学
創立10周年記念事業
ふりかえれば未来 SUAC10

ミュージカル・ドラマ

初演　いとしのクレメンタイン　一幕十三場

MY　DARLING　CLEMENTINE

本学オリジナル企画公演。プロの舞台公演に学生が制作スタッフとして参加しています。

2010／12／17（金）18：00 開場 18：30 開演　　**12／18**（土）13：30 開場 14：00 開演

会場　：静岡文化芸術大学　講堂

吹雪のナイトクラブに流れるテネシー・ワルツ一夜の奇跡が浮かびあがる

ヒットソングに誘われて甦る愛と哀しみの’50年代

センティメンタル・ジャーニー、ダニー・ボーイ、テネシーワルツ、リリーマルレーンほか全２０曲

脚本・演出　伊豫田静弘　　音楽　島津秀雄　　美術　朝倉摂　　照明　服部基
ＣＡＳＴ　　田中利花　戸井勝海
島津秀雄ピアノ　小林健作　ギター　　齋藤順　ベース　　三浦肇　ドラムス　佐々木雄一　ヴァイオリン
声の出演　　立入正之　芸文学科有志

問い合わせ:TEL 053－457－6446(静岡文化芸術大学　静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局内)
チケット販売：９月７日（火）10時より・・・・**チケットぴあ　Ｐコード406-784**
＜１階指定席＞一般　3000円　大学生以下　1500円　＜２階自由席＞一般・学生　1500円
※入場時に学生証をご提示いただく場合があります。※未就学児の入場はご遠慮ください。
プレ企画への参加には、公演チケットが必要です。☆当日、会場でチケット購入できます。

プレ企画【特別公開講座】
2010年11月25日（木）18時10分～　講堂
「朝倉摂の世界～舞台美術家という仕事～」
朝倉摂×扇田昭彦（演劇評論家）

企画・制作・プロデューサー　永井聡子　　学生制作アシスタント（45名）　チラシデザイン　松野静香
監修　平野　昭　　舞台芸術研究アドヴァイザー　梅若猶彦　広報アドヴァイザー　片山泰輔

静岡文化芸術大学
創立10周年記念事業
ふりかえれば未来 SUAC10

インフォメーション

《レオナルド・ダ・ヴィンチ複製素描画展》

《イザベッラ・デステの肖像》、パリ、ルーヴル美術館、1499-1500年

静岡文化芸術大学ギャラリー
2010年10月14日（木）～27日（水）10:00～18:00

記念シンポジウム「乱反射するレオナルド・ダ・ヴィンチ」
2010年10月15日（金）15:00～18:00　静岡文化芸術大学176大講義室

いずれも入場無料、予約不要
ホームページ　http://sowwwt.suac.ac.jp/~leonardo/

ルネサンスの爛熟期を生きたレオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519年）は、しばしば「万能の天才」と称されてきました。意外にも完成された絵画作品が少ない(『受胎告知』や『岩窟の聖母』や『ラ・ジョコンダ（モナ・リザ）』を含めた17点）一方で、夥しい数のスケッチやデッサンによってその足跡の大半が占められます。素描を含めた、科学技術分野での探求の綴られたノートは13,000ページにも及ぶと言われます。

東京大学駒場博物館所蔵のレオナルドの複製画コレクションはこれらの素描をもとにしています。全部で86点を数えるパネルはユネスコによって制作され、レオナルド生誕500年（1952年）を記念して世界各地を巡業したのちに日本の地に落ち着きました。

今回の展覧会では、このユネスコ・コレクションの全体像をセクションに分けお伝えします。レオナルドの関心は、人物（人相学、解剖学）から自然、装置へと広がりをみせていきます。まさしくその様に「天才」の真価は認められるでしょう。

展覧会の最新情報はホームページでご確認ください。

お問い合わせ　静岡文化芸術大学・企画室

特別研究報告

国際ユニヴァーサルデザイン会議を目前にして

古瀬　敏（デザイン学部空間造形学科）

静岡県は、ユニバーサルデザインを県の重点事項としてから10年以上経つことから、2002年から4年ごとにわが国で開催されている国際ユニヴァーサルデザイン会議を招致したいと国際ユニヴァーサルデザイン協議会に申し出、2010年の開催は浜松で行われることになった。本学は2000年に開学しており、建学の理念の一つであるユニバーサルデザインに関するこれまで10年間の成果も踏まえて、国際会議に寄与することをめざしている。筆者は2003年に本学に着任して以来、何度か海外からの講演者を招いて、国際シンポジウムを企画開催しており、今回はこれまでの成果に新たに積み重ねることを意識して、海外からの参加者のなかから講演者を選んで、ユニバーサルデザインを再考することを考えている。

これまでの講演者は、以下のとおりである。まず2004年1月には米国ニューヨーク州立大学バッファロー校のエドワード･スタインフェルド教授、英国王立芸術大学のロジャー･コールマン教授、そしてバンコクにある国連ESCAPでアジア太平洋バリアフリーの10年を推進してきた琉球大学の高嶺豊教授にお願いして、各地域での動きを概観した。

2004年12月には、その直前にブラジルのリオデジャネイロで開催されたユニバーサルデザイン国際会議参加者であるスコット・レインズ博士に、観光のユニバーサルデザインに関しての状況報告をお願いした。2006年10月には、京都で開催された国際ユニヴァーサルデザイン会議の参加者から、英国グラスゴウ大学のアラステア・マクドナルド教授、そして米国において障害者・高齢者の非常時安全を推進することに尽力してきたエドウィナ・ジュイエ女史に講演をお願いした。2008年11月には米国でユニバーサルデザインの父と言われてきた故ロナルド・メイス教授とずっといっしょに仕事をしてきたレスリー・ヤング女史にそれまでの成果を報告してもらった。

また、今回の国際会議のプレイベントとして、昨年2009年12月には、ユニバーサルデザインの母と言ってよいイレーン・オストロフ女史の組織から、これまた長い実績のあるスティーブ・デモス氏をお願いして、ADA（障害を持つ米国人に関する法律）制定後20年近くの動きについて紹介いただいた。

ただ、これまでの講演はどちらかといえば構築環境（都市・建築など）に関しての議論が多く、それは自治体の行うべき仕事としては重要であるものの、市民や民間企業がやるユニバーサルデザインとの関連がなかなかつけにくかった。今回はそれを意識しての話題提供を試みる予定である。

INFORMATION インフォメーション

○前期公開講座「文化とデザインの時代Ⅱ」（全5回シリーズ）

9月　4日(土)	新たなデジタルディバイドの時代	池村　六郎 教授(文化政策学科)
9月11日(土)	公共空間のデザインの新しい領域―公と私の間のデザイン―	磯村　克郎 准教授(生産造形学科)
9月25日(土)	メディアアート―「メディア」で作る「アート」とは？―	的場　ひろし 准教授(メディア造形学科)
10月　9日(土)	ジャポニズムの隆盛―世界に認められた日本の美―	立入　正之 准教授(芸術文化学科)
10月16日(土)	現代空間の美的解体	中山　定雄 講師(空間造形学科)

時　間：13：30～15：30
会　場：南棟3階　377中講義室
対　象：高校生・大学生・一般社会人
受講料：一般・大学生1,000円／回　通し受講の場合3,500円(5回分)　高校生・本学学生…無料

○後期公開講座「中国の“今”を知る～社会・経済・民族～」（全4回シリーズ）

11月27日(土)	中国経済発展の光と影～格差社会の実態～	兪　嶸　講師（国際文化学科）
12月　4日(土)	中国の対外経済交流と日中経済関係	馬　成三　教授（国際文化学科）
12月11日(土)	県内企業の中国ビジネス～現状と展望～	長村　敏孝 氏（財)静岡経済研究所主任研究員
1月22日(土)	現代中国の民族問題～伝統と現代の狭間～	孫　江　教授（国際文化学科）

時　間：13：30～15：30
会　場：南棟3階　377中講義室
対　象：高校生・大学生・一般社会人
受講料：一般・大学生1,000円／回　通し受講の場合2,800円(4回分)　高校生・本学学生…無料

○特別公開講座「薪能」

10月　5日(火)	第一夜　座談会「お面の裏側」	18：30　開演
10月　6日(水)	第二夜　現代劇「イタリアンレストラン」	18：30　開演
10月　7日(木)	第三夜　能「望月」、狂言「蝸牛」	18：00　開演

受講料：3,000円(高校生 無料)

○静岡文化芸術大学の室内楽演奏会２０１０

○ショパンの愛したプレイエル・ピアノ～弦楽器と奏でる美しい詩～
小倉貴久子（フォルテピアノ）／桐山建志・藤村政芳（ヴァイオリン）／長岡聡季（ヴィオラ）
花崎薫（チェロ）／小室昌弘（コントラバス）
＜各公演　18:00開場　18:15プレトーク　19:00開演＞
東京　11月９日（火）　第一生命ホール　全席自由　一般：4000円　学生：2000円
浜松　11月15日（月）　アクトシティ浜松音楽工房ホール　全席自由　一般：3000円　学生：1500円

○相曽賢一朗　ヴァイオリン・リサイタル2010浜松公演
ピアノ　サム・ヘイウッド
11月12日（金）　静岡文化芸術大学講堂　18:30開場　19:00開演

編集後記
今号の巻頭では、本年４月に文化・芸術研究センター長に就任された三枝成彰先生に寄稿を頂きました。現在、静岡文化芸術大学の創立 10 周年記念事業が展開されていますが、本紙でもご紹介したとおり、この秋から年末まで、記念事業関連の魅力的なプログラムが次々と発信されることとなります。10 周年の今秋、改めて過去を振り返り、今、私たちが手にしている「文化」の豊穣に感謝するとともに、これから創造される日本の文化、地域の文化にも心を向ける、そんな季節になればと。(St.)

Art & Culture
文化と芸術
文化・芸術研究センター ニュースレター
Vol.12
September,2010

発行人：三枝成彰　編集人：冨田晋司
発　行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
（事務局　静岡文化芸術大学　企画室）

VEGETABLE OIL INK